

ベトナム人学習者の日本語における長音・促音の知覚に関する問題

Đỗ Hoàng Ngân

ハノイ国家大学外国語大学、学術研究所・東洋言語文化学部

受領日：2014年12月23日；受理日：2015年05月05日

レジュメ:本研究はベトナム人日本語学習者を対象とし、知覚テストを使用した実験調査で、日本語における長音・促音の知覚に関する誤りの傾向を明らかにする。誤答を分析した結果、ベトナム人日本語学習者にとっては、低い短音を長音と誤判断する傾向が最も強かった。また、短音のパターンを促音のパターンと誤判断する傾向も見られた。

キーワード: 長音、促音、アクセント、知覚、誤判断。

1. はじめに

日本語教育の研究の中では、日本語の音声に関する研究、日本語学習者の発音の問題に関する研究が盛んである (Han M. 1992 [1]、助川1993 [2]、Min Kwang Joon 1993 [3]、横井1998 [4]、堀籠1999 [5]、木村1999 [6]、小熊2000 [7]、平川2003 [8]、Tsurutani 2003 [9]、董・池田・宮城2004[10]など)。日本語学習者の発音傾向についての調査からは、長母音と短母音・促音など特殊拍の問題の指摘が最も多く、長音と短音の識別能力には、「母語による相違点が見られた」ということが明らかになった (皆川1997[11]: p.126)。長音・短音の対立や促音のないベトナム語を母語とするベトナム人日本語学習者にとって、日本語の長音・促音などを知覚する際、困難

であるが、どのような傾向であるか。聴解教育・音声教育について様々な先行研究があるが、ベトナム人日本語学習者の聞き取り能力に関する調査研究はまだまだ少ない。本研究は、聴解過程の最初の段階である音声、または音韻を認知する「聞き取り」に関する傾向について検討していく。そこで、本研究では、これらを明らかにすることを目的とし、ベトナムの高等教育における日本語学習者を対象とし、長音・促音の聞き分け能力についての実験調査を行なう。

ベトナム人日本語学習者の長音・促音の知覚に関しては、Do Hoang Ngan (2006 [12]、2012[13]) では以下のことが明らかになった。まず、短音・長音・促音の問題については、促音>短音>長音の順番であり、促音の問題は正答率が最も高く、長音の問題は最も低いという結果になった。また、長音のある問題の方は短音の問題よりも、

* DT.: 84-942969309

Email: dohoangnganhn@gmail.com

正答率が低く、促音のある問題の方は短音の問題よりも、正答率が高かった。

韓国・中国・タイ語話者にとって、長音・促音の誤答率はほぼ同じであるが、英・西語話者には長音のほうが誤答率が高い(皆川1997)。この研究の結果からも、ベトナム人日本語学習者は、英・西語話者の場合と同じく、促音のほうが長音の問題よりも、正答率が高かった。

次に、長音の位置に関しては、韓国・中国・英・西語母語話者の場合、長音の語末位置での誤答率がやや高く、タイ語話者の場合、語頭長音での誤答が多かった(皆川1997)。Do Hoang Ngan (2006, 2012)では、皆川の研究(1997)における韓国・中国・英・西語母語話者の場合と同様、2・3年生の場合、語頭長音の方が語末長音よりも正答率がやや高かった。しかし、4年生の場合、語末長音のほうが語頭長音よりも正答率が高かった。全体的には、語頭・語末の間の有意差は認められなかった。調査結果から、語頭長音の問題にも語末長音の問題にも、4年生と2年生、4年生と3年生の間には、有意差が見られたが、3年生と2年生の間には、有意差が見られなかった。

また、アクセント型について、調査で用いたリスニング・テストの結果から、長音3モーラの正答率の高いアクセント型は「低高高」>「低高低」>「高低低」の順となった。つまり、難しい順序は「高低低」>「低高低」>「低高高」となる。ベトナム人日本語学習者にとって、3モーラ、長音「高低低」・「低高低」・「低高高」の各パターンのうち、「平板」(「低高高」)のパターンのほうが、「頭高」(「高低低」)と「中高」(「低高低」)よりも、長音の聞き分けが易しいと考えられる。

学習者レベル別の差に関しては、各問題の平均正答率を見ると、長音・語末のパ

ターンには、4年生の正答率の方が、2・3年生の正答率よりも高かった。しかし、分散分析した結果、ほとんど全ての検討したパターンに、学年別の間に、有意差が認められなかった。このことから、4年生になると長音、促音の聞き分け能力が向上するとは言えない。

以上の結果を踏まえ、本稿では、ベトナム人日本語学習者の長音、又は、促音の知覚に関する誤りの傾向を分析していく。

2. 調査の概要

2.1. 調査の目的と対象者

本研究では、長音・促音の聞き分けの課題において、ベトナム人日本語学習者の誤りの傾向を明らかにすることを研究目的とする。

本調査はベトナムにおける日本語教育が行なわれている高等教育機関の日本語学習者を対象とする。ベトナムにおける4校の大学に在籍する日本語・日本学を専攻とする2・3・4年生578名を対象として調査を行なった。未記入が含まれた回答紙を除外した結果、533名のデータが分析対象となった。被験者は、2年生192名、3年生183名、4年生158名であった。そのうち、滞日経験がある学習者は10名(2%)、無い学習者は523名(98%)であった。

被験者はすべてベトナム語母語話者であり、両親ともベトナム語母語話者であった。年齢は18歳から24歳までであった。殆どの被験者は大学に入ってから日本語を習い始めた。実験期間は学年の初めに行なわれたため、被験者の日本語の学習時間はそれぞれ、2年生約1年間、3年生2年間、4年生3年間であった。

2.2. 調査のリスニング・テスト

本調査で用いているリスニング・テストを作るため、まず、CVCV音節、意味のない「きこ」という言葉を基礎とし、長音（「きいこ」、「きこう」）と促音（「きっこ」）を加え、3つの3モーラの単語を作成した。2モーラと3モーラ日本語として可能な全てのアクセント型によって10単語に分け（A～J）、それぞれを3回繰り返し、30単語にした。さらに、それに乱数表（「Table of Random Numbers」）を使い、ランダムに提示した。リスニング・テストは日本語教育の経験がある29歳日本人女性の大学院生に読んでもらった。単語の間の休止時間は約4秒であった。リスニング・テストをDigital Sony Recorder MZ-N707を用いて、録音した。録音資料を日本語母語話者の日本語教師によって確認してもらった。回答用紙は、2モーラ「きこ」・長音、あるいは促音が含まれている3モーラの「きいこ」「きこう」「きっこ」の3パターン、とそれらのパターン以外、誤判断する可能性があるパターン「きいこう」の全て5件の選択肢の形式にした。

2.3. 調査の手順

まず、回答方法に慣れさせるために、例題を2問行なった。

被験者に録音したテープを一回のみ聞かせて、それと回答用紙の「1.きこ」「2.きっこ」「3.きいこ」「4.きこう」「5.きいこう」の中から同じ発音だと判断した項目に○を付けるよう提示した。各クラスの教室で通常の聴解授業で使用されるカセットプレーヤーを借り使用した。調査のリスニング・テストを聞く前に、音量・音質などをチェックし、カセットプレーヤーより最も遠いところに座っている被験者でもはっきり聞こえることを確認した。各レベルの人数が異なるため、レベル間の比較には一人あたりの平均を使うこととした。統計処理にはExcel 97と統計プログラムANOVA4 on the Webを使用した。分散分析の下位検定はすべて5%有意水準多重比較(ライアン法)を行なった。

3. 調査の結果と考察

3.1. 学年別発音のパターンによる正答率

表1. 全体の結果（正答率）

発音のパターン	2年生	3年生	4年生	全体
W1 [2モーラ・高低 (きこ)]	68.75%	62.11%	68.78%	66.48%
W2 [2モーラ・低高 (きこ)]	69.27%	71.77%	73.21%	71.29%
W3 [3モーラ・長音・語頭・高低低 (きいこ)]	61.46%	60.84%	51.69%	58.35%
W4 [3モーラ・長音・語頭・低高低 (きいこ)]	69.97%	67.03%	66.67%	67.98%
W5 [3モーラ・長音・語頭・低高高 (きいこ)]	67.88%	62.48%	56.12%	62.54%
W6 [3モーラ・長音・語末・高低低 (きこう)]	42.01%	35.70%	43.46%	40.28%
W7 [3モーラ・長音・語末・低高低 (きこう)]	58.85%	65.39%	70.25%	64.48%
W8 [3モーラ・長音・語末・低高高 (きこう)]	70.83%	78.14%	81.86%	76.61%
W9 [3モーラ・促音・高低低 (きっこ)]	77.26%	80.87%	82.28%	79.99%
W10 [3モーラ・促音・低高高 (きっこ)]	89.06%	86.52%	90.30%	88.56%

全ての被験者の平均正答率を見ると、W10- W9- W8- W2- W4- W1- W7- W5- W3- W6の順番で並んでいる。正答率が一番低いパターンはW6で、長音・語末・高低低(きこう)であった。3回の中で2回・1回・0回正しく答えた場合、学習者はそのパターンをまだ習得していない段階であると考え

られる。3回とも正しく答えた数を見ると、正答率が最も高いパターンは[W10促音・低高高(きっこ)]で、88.56%であった。正答率が最も低いパターンは[W6長音・語末・高低低(きこう)]であった。このことから、学習者にとって、W10が一番易しく、W6が最も困難であると考えられる。

3.2. 誤りの傾向について

表2. 学習者の誤りの傾向

			①きこ	②きっこ	③きいこ	④きこう	⑤きいこう
W1	きこ	高低	1063	288	114	115	19
W2	きこ	低高	1140	161	118	162	18
W3	きいこ	高低低	75	20	933	115	456
W4	きいこ	低高低	142	22	1087	76	272
W5	きいこ	低高高	375	91	714	87	332
W6	きこう	高低低	396	372	103	644	84
W7	きこう	低高低	293	136	70	1031	69
W8	きこう	低高高	33	18	30	1225	293
W9	きっこ	高低低	114	1279	99	75	32
W10	きっこ	低高高	60	1416	56	40	27

聞き分け調査における全体的な誤りの傾向を上表2で示した。調査で用いた各発音のパターン別に正答数と誤答数をまとめた。太字の数は正答の数を表している。①から⑤は回答用紙の選択肢の項目である。

(1) 短音を長音と誤判断する傾向

まず、高・語末の短音を長音に誤判断する傾向(つまり、W2が④・⑤に、W5が⑤になった誤答数)の傾向を見てみよう。「きこ低高」(W2)を「きこう」「きいこう」に誤判断する数は180(162+18)であり、このパターンの誤答類の中で最も多かった。また、「きいこ低高高」(W5)を「きいこう」に誤判断する数は332であり、高かった。つまり、高・語末の短音を長音に誤判断する傾向があり、W2・W5の誤答数を総合的に見ると、この誤答の種類が最

も高かった。この結果から、高・語末の短音を長音に誤判断する傾向が強いと考えられる。

次は、高・語頭の短音を長音に誤判断する傾向(つまり、W1が③・⑤に、W6が⑤になった誤答数)があるかどうかを検討する。「きこ高低」(W1)を「きいこ」「きいこう」に誤判断する数は133(114+19)であり、このパターンの誤答類の中で高くなかった。また、「きこう高低低」(W6)を「きいこう」に誤判断する数は84であり、最も低かった。つまり、高・語頭の短音を長音に誤判断する傾向は少ないと考えられる。

低・語末の短音を長音に誤判断する傾向(つまり、W1が④・⑤に、W3・W4が⑤になった誤答数)があるかどうかを検討する。W1を④・⑤に誤判断する数は134

(115+19) であり、他のパターンに誤判断する数と比較すると、その数が高いとは言えない。つまり、2モーラ（長音・促音が含まれていない）パターンの場合は、低・語末の短音を長音に誤判断することがあるが、その傾向が強くないと考えられる。一方、「きいこ高低低」（W3）を「きいこう」（⑤）に誤判断する数は456であり、全ての誤答種類の中で最も高かった。また、「きいこ低高高」（W4）を「きいこう」（⑤）に誤判断する数は272であり、このパターンの誤答類の中で最も高かった。つまり、3モーラの長音が含まれているパターンの場合は、低・語末の短音を長音に誤判断する数が最も高かった。

さらに、低・語頭の短音を長音に誤判断する傾向（つまり、W2が③・⑤に、W7・W8が⑤になった誤答数）があるかどうかを検討する。W2を③・⑤に誤判断する数は136（118+18）であり、このパターンの誤答類の中で高くなかった。「きこう低高低」（W7）を「きいこう」（⑤）に誤判断する数は69であり、このパターンの誤答類の中で最も低かった。つまり、2モーラ（長音が含まれていない）のパターン・3モーラ長音中高のパターンの場合、低・語頭の短音を長音に誤判断する数が低かった。また、「きこう低高高」（W8）を「きいこう」（⑤）に誤判断する数は293であり、このパターンの誤答類の中で最も高かった。つまり、3モーラ長音平板のパターンの場合、低・語頭の短音を長音に誤判断する数が最も高かった。

また、W3+W4+W5（語頭長音）とW6+W7+W8（語末長音）が「⑤きいこう」になった誤答数を比較してみると、それぞれ1060（456+272+332）・446（84+69+293）となった。つまり、語末の短音を長音と誤判断する数は語頭の短音を長音と誤判断する数よりも高かった。即ち、語末の短音を長音と誤判断する傾向があることが分る。

(2) 短音を促音と誤判断する傾向

促音と間違った誤答の数を見ると、最も高い項目は「きこう高低低」（W6）（372）であった。さらに、短音問題の高低のパターン「きこ高低」（W1）において、短音を促音と誤判断する場合の方は他の音と誤判断する数よりも高かった（288）。次に、「きこ低高」（W2）においても、短音を促音と誤判断する数が高かった（161）。逆に、表2を見ると、長音を促音にとった誤答数（20+22+91=133）が低かったことが分かる。

調査の結果を全体的に見ると、ベトナム人日本語学習者にとって、長音と促音の聞き分けによる課題には、大きな困難があることが分かる。日本語はモーラリズムを持つ言語で、それぞれの拍は同じ長さで発音される。それに対して、ベトナム語は、六声を区別する音調の言語であり、長短母音が対立することはない。日本語母語話者の場合は、「拍のキーワードである「等時性」は日本語話者の心理に存在する」（松崎1998 [14]: p.175)。しかし、ベトナム人日本語学習者の場合は、長音・短音などのような「等時性」について認識されていない。「多くの学習者は特殊拍を自立拍1拍分ではなく、「音節」の一部とみなしている」（松崎1998:p.175)。従って、日本語学習者にとって、特殊拍を知覚するのは困難であり、聞き取れたり、自然に日本語を話せたりするようになるためにはよく練習することが大切である。

調査に用いた発音パターン別の分析から、学習者の誤りの傾向が明らかになった。まず、2モーラ（長音・促音が含まれていない）パターンの場合は、低・語末の短音を長音に誤判断することがあるが、その傾向は強くないと考えられる。それに対して、3モーラの長音が含まれているパターンの場合は、低・語末の短音を長音に誤判断する数が最も高かった。この結果から、3モ

一ラの長音が含まれているパターンの場合、低・語末の短音を長音に誤判断する傾向が強かったと考えられる。調査結果から、高・語末の短音を長音に誤判断する誤答数が最も高かったことで、高・語末の短音を長音とする誤判断する傾向が強いと考えられる。また、低・語末の短音を長音に判断する誤答数が最も高かったので、低・語末の短音を長音に誤判断する傾向も強いと言える。低・語頭の短音を長音とする誤答数が全体的に高くないので、低・語頭の短音を長音に誤判断する傾向があるが強くない。しかし、高・語頭の短音を長音とする誤答数が最も低かったことから、高・語頭の短音を長音に誤判断する傾向はないと言える。

さらに、調査結果から、短音を促音とする誤答数が高かったが、長音を促音とする誤答数は低かった。つまり、長音を促音と誤判断する傾向はないのに対して、短音を促音と誤判断する傾向はあると考えられる。

これまでの先行研究では、日本語の長音・短音の聞き分けの課題において、短音を長音と誤判断する傾向があると指摘されている(小熊(2000) ; 皆川他(2003) [15]など)。小熊(2000)の研究では、英語母語話者が高音である短音を長音と誤判断する傾向がみられると指摘した。皆川他(2003)は、高く、強い音は長い母音に聞こえやすいため、短母音を長母音に誤る傾向があり、低くて、弱い音は短い母音に聞こえやすいので、短母音に聞き誤られる傾向があることを示した。

本研究では、ベトナム人日本語学習者の場合、短音のパターンを促音のパターンと誤判断する傾向も見られた。また、英語母語話者と少し違い、高音である短音だけではなく、低音である短音も長音と誤判断する傾向がある。金村(1999)によると、ベトナム人日本語学習者は、日本語を発音する際、「長音化」「促音化」という現象

が見られる。これが聞き取りにも影響して、短音を長音や促音と間違いやすいと考えられる。

4. おわりに

本研究では、ベトナム人日本語学習者を対象に、長音と促音の聞き分け能力について実験した。データを分析した結果、ベトナム人母語話者にとって、長音と促音の聞き分け問題において困難があることが分かった。短音・長音・促音の聞き分けの際学習者の誤り傾向に関しては、低い短音を長音と誤判断する傾向が最も強かった。また、短音のパターンを促音のパターンと誤判断する傾向も見られた。

ベトナムでの日本語教育現場の状態を踏まえてみると、聴解教育・音声教育において、音声の練習が足りないことは事実である。音声の項目を習得するため、練習量を増やす必要があると考えられる。また、「長音の長短の指導だけでは不十分で、同時にアクセントにも学習者の目を向けさせることが大切」である(松崎1998: p.175)。今後は、以上明らかになった点を踏まえて、日本語の教材、教授法、日本語教育のための設備など、または、日本語教育に関する政策などについても考えるべきであろう。

今回は2拍と3拍のパターンだけを使用したため、語中に長音が存在するパターンを検討することができなかった。今後は、聞き分けテストの材料を増やし、4モーラの言葉、語中長音のパターンなども使用し、実験する必要がある。

また、本調査では、「きこ」という「無意味語」のみに基づいて、リスニング・テストを作ったので、長母音(/i/と/o/)や促音(/k/)の種類が少なかった。他の長母音・促音の種類(例えば、長母音/a//u/)や

促音/p//t/) もリスニング・テストに入れ、長母音・促音の種類を増やす必要がある。

この調査の対象者はベトナムにおける4校の大学で日本語を学習している者であり、大学によって教材や授業の内容、教師など少し異なっているが、教師がほとんど同じ母語話者ベトナム人教師であり、学習環境なども同じである。そこで、国内(日本)の日本語学習者と海外の日本語学習者の長音・促音の聞き分け能力を比較していきたい。

主な参考文献

- [1] Han M., The Timing Control of Germinate and Single Stop Consonants in Japanese: A Challenge for Nonnative Speakers, *Phonetica*, No. 49 (1992) 102.
- [2] 助川泰彦、母語別に見た発音の傾向—アンケート調査の結果から—、『日本語音声と日本語教育』、研究成果報告書(1993) 87.
- [3] Min Kwang Joon (著) 深見兼孝(翻訳)、日本語促音の聴取判断に関する研究、『世界の日本語教育』3号(1993) 237.
- [4] 横井和子、学習者の発音上の問題点指摘とその効果—大規模クラスを対象にした発音チェックとフィードバック、『平成10年度日本語教育学会春季大会予稿集』(1998) 159.
- [5] 堀籠未央、韓国語話者と日本語話者における促音知覚の手がかりについて『ことばの科学』12号、名古屋大学言語文化部言語教育学会、(1999) 275.
- [6] 金村久美、ベトナム語母語話者による日本語の発音の音声上の特徴、『ことばの科学』第12号、名古屋大学言語文化部言語教育学会、(1999) 73~91.
- [7] 小熊利江、英語母語話者による長音と短音の知覚、『世界の日本語教育』10号、国際交流基金日本語国際センター(2000) 43.
- [8] 平川奈津子、中国語母語話者による特殊拍の聞き取りと発音の関係、『広島大学大学院教育学研究科平成15年度教育学研究科修士論文抄』(2003) 225.
- [9] Tsurutani, Chiharu, Speech Rate and the Perception of Geminate Consonants and Long Vowels: A Study of English-Speaking Learners of Japanese 『日本語教育』119号(2003) 51.
- [10] 董天寧・池田朋子・宮城幸枝、中国人日本語学習者における長音・短音の知覚、『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会(2004) 209.
- [11] 皆川泰代、長音・短音の識別におけるアクセント型と音節位置の要因—韓国・タイ・中国・英・西語母語話者の場合—、『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』(1997) 123.
- [12] Do Hoang Ngan、ベトナムにおける日本語教育の問題点について—大学における聴解教育をめぐる—、広島大学大学院国際協力研究科修士論文、2006.
- [13] Do Hoang Ngan、長音・促音の聞き取りに与える長音の位置・アクセントの影響—日本語を専攻とするベトナム人学生を対象に—、『VNU Journal of Science, Foreign Languages』28号(2012) 242.
- [14] 松崎寛・河野俊之、『よくわかる音声』株式会社アルク、1998.
- [15] 皆川泰代・前川喜久雄・桐谷滋、日本語学習者の長/短母音の同定におけるピッチ型と音節位置の効果、『音声研究』6巻2号(2003) 88.

Vấn đề nhận biết trường âm và âm ngắt tiếng Nhật của người học Việt Nam

Đỗ Hoàng Ngân

*Khoa Ngôn ngữ và Văn hóa Phương Đông, Trường Đại học Ngoại ngữ, ĐHQGHN,
Phạm Văn Đồng, Cầu Giấy, Hà Nội, Việt Nam*

Tóm tắt: Tiếp theo bài viết phân tích mối quan hệ giữa các yếu tố như số lượng mora (âm tiết) của từ, vị trí của trường âm trong từ và dạng thức phân bố cao độ của haku với việc nhận biết đoán âm, trường âm và âm ngắt trong tiếng Nhật, bài viết này phân tích và đưa ra xu hướng lỗi của người học Việt Nam trong việc nhận biết trường âm và âm ngắt tiếng Nhật. Nghiên cứu đã thống kê, tổng hợp và phân loại những trường hợp nhận biết sai trong bài nghe nhận biết trường âm và âm ngắt tiếng Nhật của sinh viên chuyên ngành tiếng Nhật. Kết quả nghiên cứu chỉ ra rằng người học Việt Nam có xu hướng nhận biết nhầm đoán âm có cao độ thấp thành trường âm, một số trường hợp khác lại nhận biết nhầm đoán âm thành âm ngắt.

Từ khóa: Trường âm, âm ngắt, giọng, nhận biết, phán đoán sai.